The Japan Society of Educational Sociology

が，なぜ日本の一般読者に愛され，支持されてきたのか，そうした分析が必要に思うが，どうだろうか。

◆A5判　207頁　5,500円（税別）
有精堂

■ 書 評 ■

米川英樹・江原武一　編

『自己意識とキャリア形成—アメリカ高校卒業生にみる—』

日本労働研究機構　小杉礼子

本書のねらいは，「はじがき」によれば，アメリカの中等教育機関，とくに総合制ハイスクールが過去および現在にわたり果たしている役割を明らかにし，多くの国に波及していった総合制ハイスクールの可能性と限界を探求することであるとされている。その可能性と限界は，表題の「自己意識」と「キャリア形成」の実態によって測られるという意図であろう。そして，実態は米国教育省の「高校生将来調査」および「NLS調査」のパネルデータから描かれている。編者を始めとする9人の意欲的な実証分析の成果集である。

構成は3部10章で，第1部「今日のアメリカの中等教育」は1章「アメリカ中等教育の歴史的展開」，2章「転機に立つアメリカ中等教育」，3章「教育機会の平等を求めて」から成る。歴史的・制度的側面からの論文で，続く第2部，第3部の実証分析のために，基本的認識を提供している部分だと思われる。第2部「高校教育と生徒の自己形成」では，4章「マイノリティの教育と進学動向」で多文化教育の実態分析・評価を行い，5章「高校生の価値観」，6章「高校生の自己意識形成と進路選択」では高校生の意識の変化をとり上げている。第3部「アメリカ青年のキャリア形成」は，高校卒業後のキャリア形成の実態分析で，7章「高校卒業生のキャリア形成」，8章「アメリカ高校生の大学進学」，9章「大学生は変わったか」，10章「アメリカの職業専門学校」から成る。私にはこの10章全てを論ずる力量も，また紙幅もないので，以下ではわが国の高卒者のキャリア形成にかかる実証研究を続けてきた者として，私の関心に沿った後半のいくつかの章について紹介し，若干の私見を添えたい。

まず，9章「大学生は変わったか」では，2年制大学・パートタイム課程での学生，特に25歳以上の成人学生の増加が著しい一方，4年制大学のフルタイム課程では非成人学生が9割前後を占める状況は変わっていないことを指摘し，これを平等性と優秀性を同時に確保しうる構造ではないかと論じる。さらに，「高校生将来調査」等のデータから中等後教育進学率が低下し，また，学力上位の者の4年制大学フルタイム課程（スレート）進学率は60年代には減ったがその後下げ止まっていることから，70年代には4年制

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

大学の優秀性の低下は起こっていないとする。そして，この後の分析が非常に興味深い。25歳未満でハイスクール卒業後何年かブランクの後に進学したディレイド・エントリーの学生はストレート進学者の約半数に達しているが，彼らは社会階層や学力的にはストレート進学者と変わりなく，4年制大学はストレート進学者の比率を減らしたが，優秀性においては変化していないのではないかと論じている。ディレイド・エントリー者をパネルデータから巧みにとらえ，その質を分析する着眼がよく，また，こうしたアメリカの経験をわが国の大学改革への貢献を意識して議論しており，共感できる部分が多い。

7章「高校卒業生のキャリア形成」は，「高校生将来調査」から卒業後の就業・就学の概観を描く。まず，卒業1年後の状況を整理した後，卒業直後に専門学校や大学に応募したかどうかでサンプルを2分し，それぞれのその後の就業・就学状況をみる。就学率は受験の有無で大きく異なるが，就労率は非受験グループのほうが8割と高いものの，即受験グループでも6割から4年後には7割とあまり変わらない。さらに，どちらも入職が高校在学中のことが少なくなく，転職もかなり頻繁に行われている。就学の有無に関わらず，長期雇用に至るまでの「移行期」のはじまりと終わりは明確ではなく，高校卒業後のキャリアは教育と労働の低い垣根をまたぐようにして形成されていくと指摘している。私どもでつい最近，わが国の高卒者パネル調査結果をとりまとめたところだが，確かにこの点の彼我の差は大きく，また，今後，わが国においても大学等企業外の資源を活用して職業能力形成を図っていくことが政策的課題となっており，こうした実態の解明は重要だと思う。ただここで，就学実態ではなく受験の有無を分析の軸にしいている点はうなずけないところがある。また，わが国の若年者の離職状況についての認識も，若干疑問がある。

次いで本書では，先の2グループの現職への満足の程度がほとんど同じであることを指摘し，機会の平等がこの背景にあると論じる。私どものパネルデータでは，就業形態や職種，性・学歴によって現職への満足感に大きな違いがみられた。この彼我の違いも大いに興味深く，就業状況の違いや性別の分析結果が採り上げられなかったのは残念である。また，垣根は低いとはいえ，9章で指摘される中等後教育の質的分化もあり，就学実態との関係もぜひ教えていただきたいところである。

この他，6章「高校生の自己意識形成と進路選択」では，80年代の高校生（特にマイノリティ層）で自尊心が高まっている反面，環境統制感が低くなっていることから，社会変化と自己意識の形成の関係を論じ，また，8章「アメリカ高校生の大学進学」では，奨学金政策が社会的公正の実現に大きな影響力をもつ実態を分析し，10章「アメリカの職業専門学校」はコミュニティカレッジの蔭でほとんど知られていなかった私立営利教育機関について採り上げ，それぞれに興味深い。

本書は，私には非常に刺激されるところが多かった。ただ，「はしがき」を読ん

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

だときから，アメリカのハイスクールに類似した中等教育機関をもつわが国の教育改革を意識した議論を期待してしまったために，（いくつかの章では言及されたが），これがよりまとまって提供されればと，欲張った読後感をもってしまった。さらなる研究の発展を期待する

◆A5判　232頁　2,500円（税別）
学文社

NII-Electronic Library Service